

2023. 7

(主な内容)

- コロナ禍の不安やストレス、ネット社会の中高生～「中学生・高校生の生活と意識調査2022」の結果から～ 1
- 告知板 8

中央調査報

コロナ禍の不安やストレス、ネット社会の中高生 ～「中学生・高校生の生活と意識調査2022」の結果から～

NHK放送文化研究所 世論調査部 中山 準之助

1. はじめに

2022年の夏に、NHK放送文化研究所は全国の中学生・高校生の年齢にあたる人とその親を対象にした世論調査「中学生と高校生の生活と意識調査」（以降、「中高生調査」）を10年ぶりに実施した。

今回対象となった中高生は、2004年から2010年に生まれた世代だ。2008年のリーマンショック後の経済の停滞があった頃に生まれ育ち、2008年にアップル社のiPhone、翌年にはGoogle社のOSを搭載したアンドロイド型スマートフォンが相次いで日本にも登場¹⁾して以降のSNSサービス急拡大の時期に成長し、幼少期から身近に使える環境にある「ソーシャルネイティ

ブ世代」とも言われる。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大などの社会の変化のほか、制度面でも2016年、18歳に投票権が与えられ、2022年4月には成人年齢が20歳から18歳へと引き下げられるなど、取り巻く環境や、社会の制度が大きく変わった時代を生きてきたとも言える。

そうした令和の中高生のいまの生活実態、意識や価値観を捉えるため、「中高生調査」を実施した。なお、調査が行われた時期は、政府がマスク着用を推奨し、新型コロナウイルス感染症を感染症法上の「2類相当」としていた時期で、現在と状況が異なる点に留意されたい。

調査の概要は、表1の通りである。

表1 調査の概要

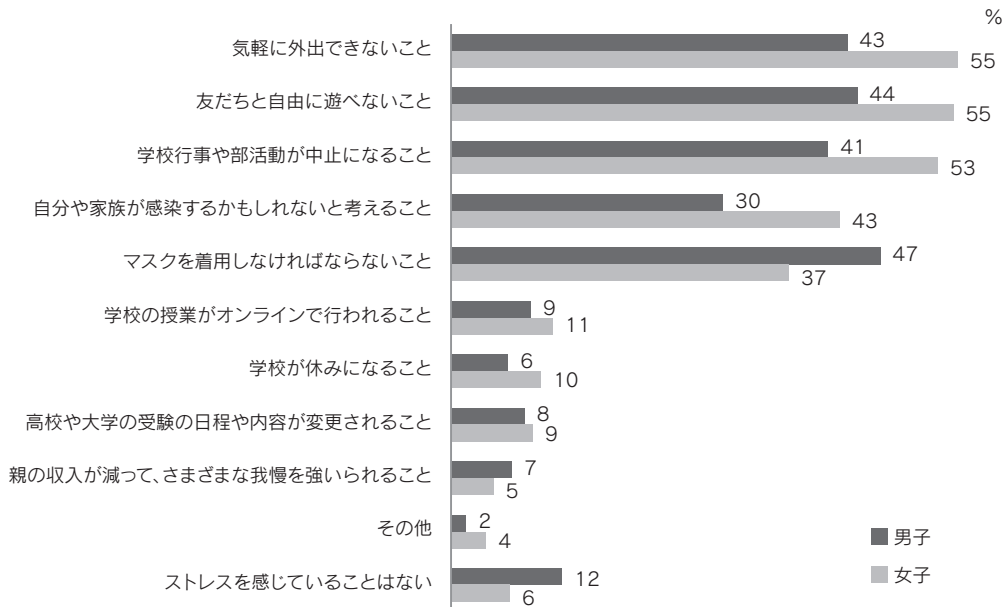
調査目的	中学生・高校生の年代の子どもたちの意識や実態を探るとともに、それぞれの父母にも、親から見た子どもの姿や、親としての考えを聞き、意識の違いを把握する。	
調査時期	2022年7月19日(火)～8月31日(水)	
調査方法	郵送法	
調査対象	全国の12～18歳	全国の12～18歳の父母
調査相手	住民基本台帳から層化無作為2段抽出 1,800人(12人×150地点)	生徒調査の調査相手1,800人の父母 (父か母がいない場合も含む)
調査有効数(率)	1,183人(65.7%)	父親 1,031人(57.3%) 母親 1,197人(66.5%)
	中学生 596人 高校生 556人	

※調査相手抽出手順の詳細はNHK放送文化研究所のウェブサイトを参照
<https://www.nhk.or.jp/bunken/yoron/nhk/process/sampling.html>

1) 総務省 『令和元年版 情報通信白書』

<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd111110.html>

図1 コロナ禍のストレス(複数回答、女子で回答の多い順)＜男女別＞



2. コロナ禍の悩みやストレス

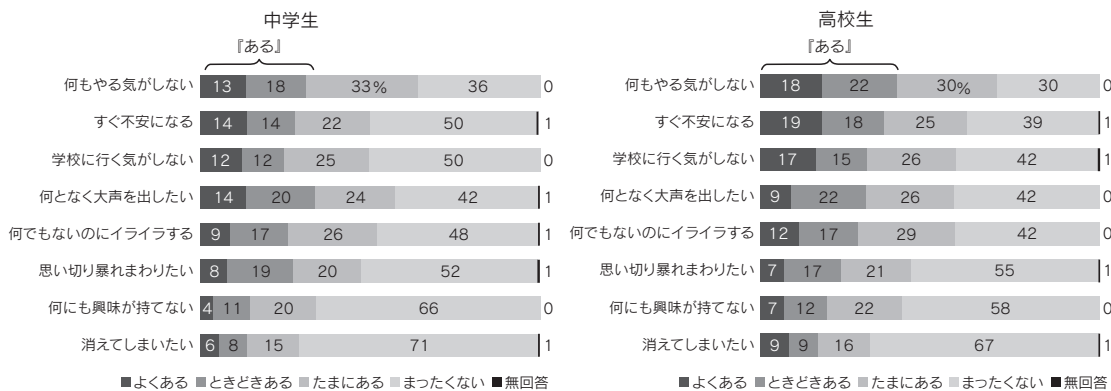
コロナ禍のストレス

2020年の新型コロナウイルスの感染拡大以降、中高生たちは、学校でのマスクの着用や行事の中止など、さまざまな影響を受けてきた。中高生たちはどのような思いを抱えてきたのだろうか。まず「新型コロナウイルスの感染拡大によって、ストレスを感じていることがあるか」を図1の11項目から複数回答で選んでもらったところ、実に

9割近い中高生が何らかのストレスを選んだ。

男女別にみると、「気軽に外出できないこと」、「友だちと自由に遊べないこと」、「学校行事や部活動が中止になること」は女子で5割を超え、それぞれ男子の4割を上回る²⁾。また、「自分や家族が感染するかもしれないと考えること」は女子が43%で、男子の30%を上回る。一方、男子が女子を上回ったのは、「マスクを着用しなければならないこと」だけで、NHK放送文化研究所が

図2 不安定な心理8項目(『ある(よく+ときどき)』高校生の多い順)＜中高別＞



2) 選択肢を囲う『』は複数の選択肢を合算している場合、「」は単独の場合を示している。なお、『』の%は選択肢を単純に足し挙げたものではなく、各選択肢の実数を足し挙げて再計算したものである。

実施した他の調査³⁾においても、コロナ禍でストレスが増えたのは、男性よりも女性が多いという結果がみられるが、中高生でも同様の傾向であった。

「何もやる気がしない」「不安になる」が『ある』 高校生約4割

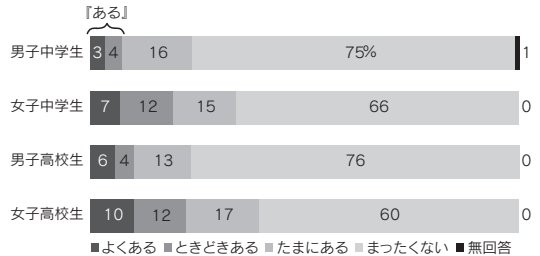
心の健康について調べるため、図2の8つの不安定な心理状態について、どの程度感じることがあるかを尋ねた。

中高別にみると、『ある』（「よくある」「ときどきある」の合計）は、高校生では、「何もやる気がしない」と「すぐ不安になる」が4割ほど、「学校に行く気がしない」が3割ほどで多く、いずれも高校生が中学生を上回った⁴⁾。

また、「消えてしまいたい」については、中高生ともに『ある』は1割台で、両者に差はないが、男女中高生別でみると（図3）、『ある』は、男子が中高ともに1割程度なのに対し、女子中学生は19%、女子高校生は22%で、女子が男子よりも多い。この他、図表は割愛したが、「何もやる

気がしない」をはじめ、高校生で多い順の上位5項目においても、女子が男子を上回り、心理面の不安定さは、中学生よりも高校生、さらには、男子よりも女子で強い傾向がみられた。

図3 「消えてしまいたい」<男女中高別>

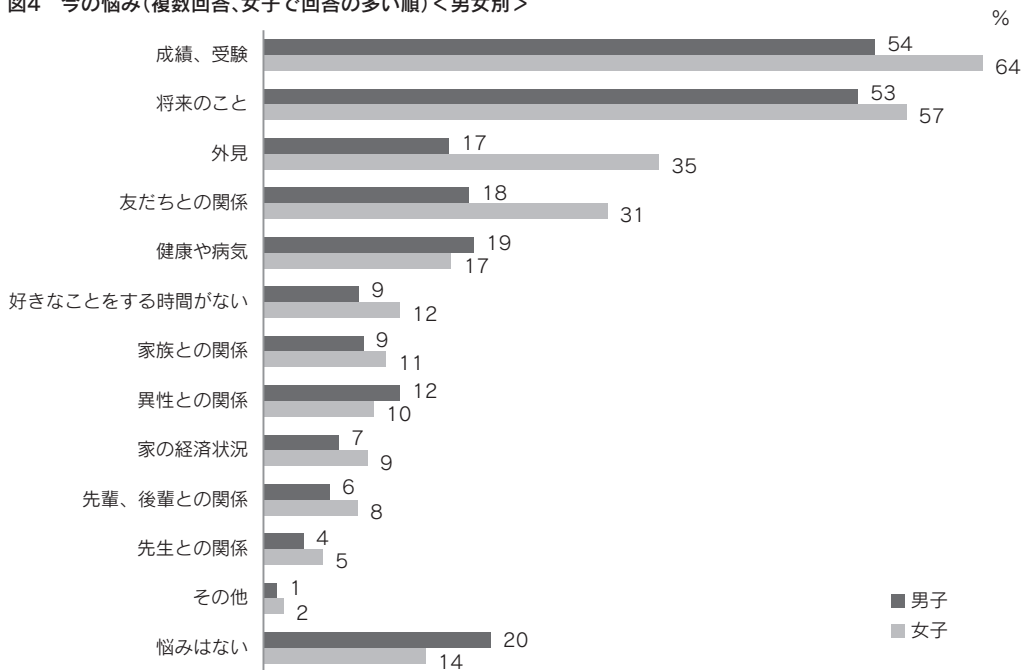


今の悩み「外見」女子で35%

中高生に対して、「今、悩んでいることはあるか」図4の13項目から複数回答で選んでもらった。「成績、受験」と「将来のこと」が上位に挙がり、特に「外見」で男女差が大きく、男子が17%、女子が35%で、女子が男子を18ポイント上回った。

コロナ禍の影響をとくに女子が被っていること、心理面で不安定さについても、女子のほ

図4 今の悩み(複数回答、女子で回答の多い順)<男女別>



3) 小林利行・村田ひろ子、2022、「コロナ禍は暮らしや意識をどう変えたのか〜新型コロナウイルス感染症に関する世論調査(第2回)」の結果から〜、NHK放送文化研究所、『放送研究と調査』2022年7月号

4) 互いに独立な%の検定(信頼度95%)を行った結果(以下同様)。

うが高いことが見てとれた。「ソーシャルネイティブ世代」の今の中高校生。次に、SNSの利用についてみていきたい。

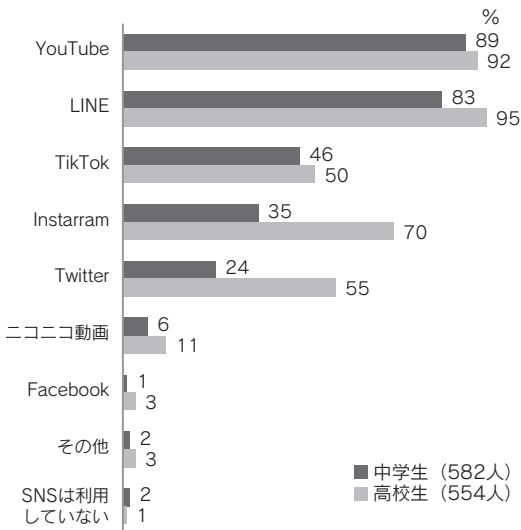
3. 中高生のネットの利用

「YouTube」は中高で約9割、「LINE」は中学生8割、高校生9割台

中高生のインターネットの利用の実態はどうなっているのか。「インターネットを使っていない」と「無回答」を除く『インターネットを使っている』中高生は、全体の99%になっている。その彼らに対して、利用しているSNSを複数回答で尋ねた(図5)。

中高別にみると、中高ともに、「YouTube」と「LINE」が突出して多く、中学生では「YouTube」が89%、LINEが83%、高校生では「YouTube」が92%、「LINE」が95%となっている。高校生が、中学生を上回ったのは、「LINE」、「Instagram」、「Twitter」で、特に「Instagram」と、「Twitter」は、高校生が中学生より30ポイントほど多く、高校生になると利用が急激に増える実態がみてとれる。また、「Instagram」の利用は、男子高校生で65%であるのに対し、女子高校生では75%とより多く、男子より女子でより使われていることが確認できた。

図5 利用しているSNS(複数回答、『インターネットを使っている』と回答した人) <男女別>

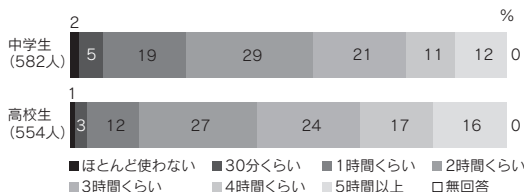


インターネットの利用時間「2時間くらい」が中高ともに3割弱で最多

「インターネットを使っている」と回答した人に、平日(夏休みなど学校が休みの日は除く)1日の平均利用時間を図6の7つの選択肢から選んでもらったところ、最も多いのは、「2時間くらい」で、中高ともに3割ほど、また高校生では「3時間くらい」も24%と多い。

なお、テレビについては、中学生の25%、高校生の38%が「ほとんど見ない」と回答し、メディアの利用としてはインターネットが中学生、高校生に浸透している状況がみてとれる。

図6 インターネットの利用時間(『インターネットを使っている』と回答した人) <中高別>

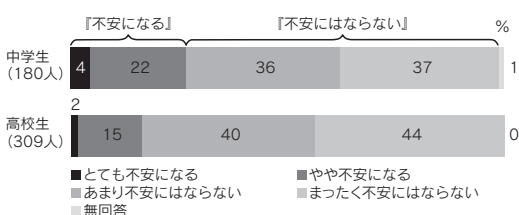


投稿反応少なくても『不安にはならない』

それでは、中高生は、どのような意識で、インターネットを使っているのだろうか。『インターネットを使っている』という人の99%にあたる「SNSを利用している」人のうち、「投稿することがある」人は44%であった。「投稿することがある」人に、「反応が少ないと、不安になるか、それとも不安にならないか」を尋ねた(図7)。

中学生、高校生ともに、『不安にはならない(あまり+まったく)』が、『不安になる(とても+やや)』を上回り、特に、高校生では『不安にならない』が84%と、『不安になる』の17%を大きく上回った。なお、男女差は特にはない。

図7 「SNS上の承認欲求」(「SNSで投稿することがある」と回答した人) <中高別>



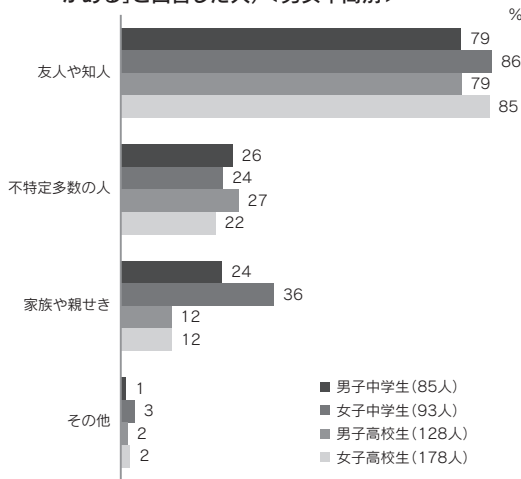
「不特定多数の人」に向け投稿 中高ともに4人に1人

では、「誰に向けて投稿しているのか」、図8の4つの項目から複数回答で選んでもらった。

男女中高別にみると、「友人や知人」が8割前後と多く、「不特定多数の人」が2割台だった。「家族や親せき」は、男子中学生で24%、女子中学生で36%なのに対し、高校生では男子、女子ともに12%と少なく、特に女子では中学生より20ポイント以上少ない。

特に「不特定多数の人」をあげたのが、中学生、高校生ともおよそ4人に1人にのぼる点は特筆すべきであろう。年齢が上がるに従って、ネットによる新たな人間関係のできる可能性が高くなることがうかがえる。

図8 SNSの投稿対象(複数回答、「SNSで投稿することがある」と回答した人) <男女中高別>



現在は小学校でも警察関係者が学校に出向き、ネットの使い方の危険例を紹介するなどの授業が早い段階から行われるようになり、リテラシーの基礎となる情報は届けられている。コロナ禍でオンライン授業の活用も進み、ネットの利用が広がる中で、子どもたちに、犯罪や事件、危険な事例の情報を伝えていくことはもちろんだが、同時に、ITツールを活用して世界を広げられるようなサポートも必要になっていくであろう。

4. SNSでの人間関係の変化

「SNSだけで、会ったことがない友だち」『いる』高校生で4割

次に、ネット環境が急速に変わる中での中高

生のコミュニケーションの意識を探りたい。今回、友だちの数について、「SNSだけのつきあいで、実際には会ったことがない友だち」がどれくらいいるのか、図9の4つの選択肢から1つを選んでもらった。結果は、中学生では、「いない」が73%で最も多いものの、会ったことがない友だちが1人以上『いる(1人+2~3人+4~9人+10人以上)』と答えた人が26%にのぼる。さらに、高校生では、「いない」が58%、1人以上『いる』と答えた人は42%と、4割に達する。

また、「SNSで知り合って、実際に会うようになった友だち」について尋ねたところ(図10)、「いない」が、中学生で92%、高校生で85%と最も多い一方で、1人以上『いる』と答えた人が高校生では14%と、2けたに達した。ネット社会の急速な進展で、こうした関係構築が更に広がっていくのか今後が注目される。

図9 SNSだけのつきあいで、実際には会ったことがない友だち <中高別>

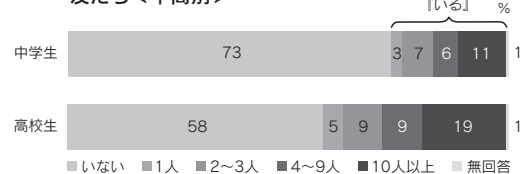
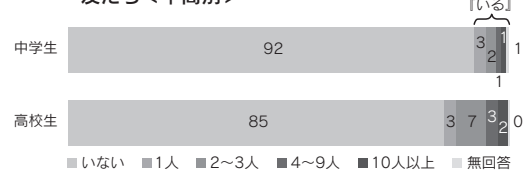


図10 SNSで知り合って、実際に会うようになった友だち <中高別>

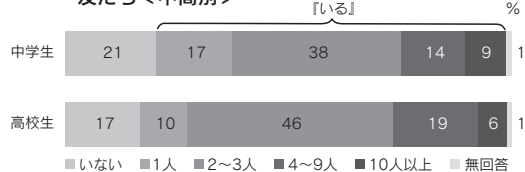


「深刻な悩みを相談できる友だち」が「いない」は中高ともに約2割

ネットを介して、新しい形の友人関係を築く中高生が一定数いる中で、リアルな友人関係はどうなのか。

「いじめなど深刻な悩みごとを相談できる友

図11 いじめなど深刻な悩みごとを相談できる友だち <中高別>



だち]についても尋ねたところ(図11)、中高生ともに「2~3人」が最も多い(中学生38%、高校生46%)。ここで注目したいのが「いない」で、中学生は21%、高校生も17%と、2割前後である。ネットという人間関係を広げるツールが浸透する一方、悩みを相談できる人がいないのが、5~6人に1人いることは、留意すべきであろう。

悩みや心配ごとの相談相手 高校生「友だち」4割「お母さん」3割

では、そうした悩みを誰に打ち明けているのか。「悩みごとや心配ごとを相談するとしたら、主に誰に相談するか」を尋ねたところ(図12)、中学生では、「友だち」と「お母さん」が3割台で同程度、高校生では、「友だち」が43%で最も多く、次いで、「お母さん」が30%である。「お母さん」は「友だち」と同様、相談相手として重要な位置を占めている。

親からの視点でもみしてみる(図13)。父母に対して、「子どもが悩みごとや心配ごとがあるときに、主に誰に相談すると思うか」を尋ねたところ、父親では、「母親」が64%で最も多く、「友だち」が16%であった。一方、母親では、「母親(自分)」が44%で最も多く、次いで「友だち」が30%、「父親」は5%である。中高生自らが考えているよりも、親、特に父親は「相談相手は母親」と思う人が多くなっている。

図12 悩みや心配ごとの相談相手<中高別>

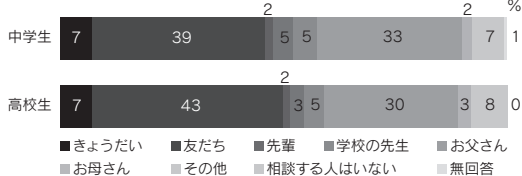
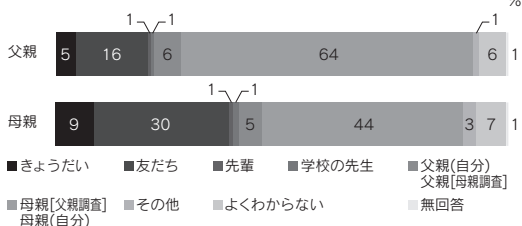


図13 父母 子どもが悩みや心配ごとを誰に相談すると思うか

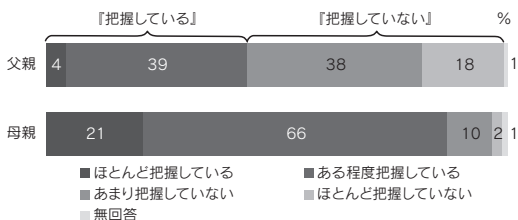


子どもの友人関係『把握している』父親4割 母親9割近く

一方、「父親」をあげているのは、中高生も母親も父親自身も5~6%になっている。

「子どもの友だち関係について、どの程度把握しているか」を親に尋ねた質問では、父親は、「ほとんど把握している」が4%、「ある程度把握している」が39%で、合わせて『把握している(ほとんど+ある程度)』が44%にとどまった。一方で、母親は、「ほとんど把握している」が21%、「ある程度把握している」が66%で、合わせて『把握している』は87%と9割近い(図14)。悩みの相談先として、「父親」の存在感が薄い背景には、子の友人関係を『把握していない』が多い点も影響しているのではなかろうか。

図14 父母 子どもへの友人関係の把握



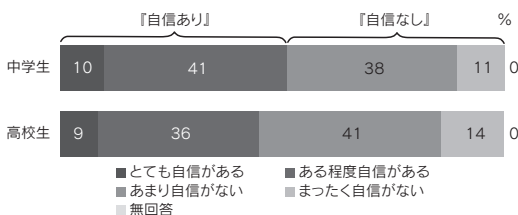
SNSが浸透し、コミュニケーションも多様化する中で、子どもたちを支える人が「母親」に限られる必要はないはずである。そこには、「父親」がいてもよいし、地域の大人がいてもよい。複雑化する社会における子どもたちの思いについて最後に迫りたい。

5. 将来に向けて

『自信あり』と『自信なし』中高で逆転 高校生『自信なし』が多い

中高生に対して、「自分に自信があるか」を尋ねたところ、自分に『自信あり(とても+ある程度)』の人は中学生では51%、高校生では45%で、中学生が多い。一方『自信なし(あまり+まった)』が多い

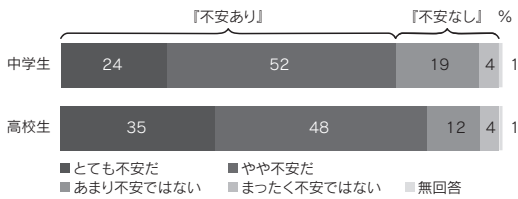
図15 自分に自信<中高別>



く)の人は中学生では49%、高校生では55%で、高校生のほうが多い(図15)。

一方で、自分の将来への「不安」を尋ねたところ、『不安あり(とても+やや)』が、中学生では7割台、高校生では8割台で、『不安なし(あまり+まったく)』を大きく上回る(図16)。年齢が上がるに従って、自信がなく、不安が拡大する傾向がある。

図16 将来への「不安」<中高別>



18歳から大人 高校生で「早い」5割超 母親では「早い」7割

では、いま現在、大人になる準備はできているのだろうか。「18歳から大人として扱われることについてどう思うか」を尋ねたところ、中学生では「早い」が4割、高校生では「早い」が5割を超え、「ちょうどよい」を上回る。学年別にみると、18歳になる可能性のある高校3年生で、「早い」が58%と最も多く、特に女子高校生では、「早い」が62%で、「ちょうどよい」の36%を大きく上回った(図17)。

父母に対しても、「18歳から大人として扱われることについてどう思うか」を尋ねたところ、

図17 18歳で大人<男女中高別>

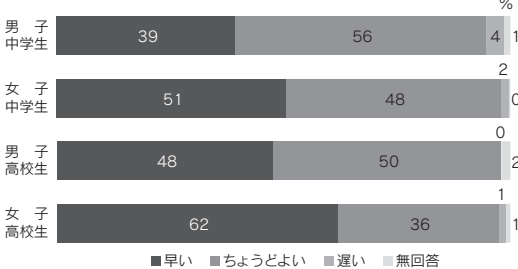
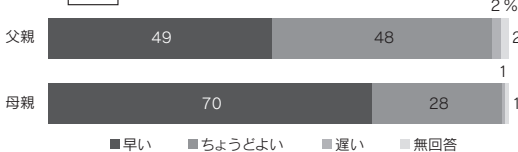


図18 父母 18歳で大人



父親で、「早い」は5割ほど、母親では、「早い」が70%で、「ちょうどよい」(28%)を大きく上回った(図18)。

制度の面で、国が自立を促す政策を進めている一方で、いよいよ大人になるタイミングで親を含めて「早い」と感じる人たちがいて、大人に近づけば近づくほど『自信なし』や、将来への『不安あり』の人が多く点を見ても、自立を促すサポートを、学校だけでなく、社会全体でもしっかりと行うとともに、自信を持ち、将来に向け明るい展望を抱ける世の中にする努力を大人側もしていく必要があるのではなかろうか。

6.まとめ

以上、「中高生調査」の結果から、3年間続いてきたコロナ禍のストレスと、ネット社会を生きる中での人間関係と意識についてみてきた。

特に、ソーシャルネイティブとも言われる世代らしく、SNSを使いこなし、新たな人間関係も築いている現状が見てとれ、劇的な変化の時代も柔軟にたくましく生きている姿が垣間見られた。その一方で、対面の人間関係は今でも、悩みの相談など非常に大事な点である。

コロナ禍の影響から家庭にいる時間が以前より多くなったとされる中高生であるが、友だちに加えて母親の存在感がある一方、父親やあるいは周囲の大人が果たせることもまだあるのではないか。

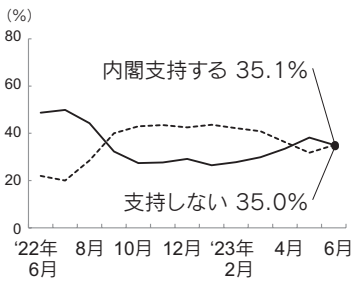
18歳成人など、制度の面だけでなく、教育や家庭、社会がともに子どもたちの明るい未来を描ける世に変えていくためにも、大人側も変わっていく必要があるのだと考える。

◇ 告 知 板

6月の時事世論調査

6月の時事世論調査によると、岸田内閣の支持率は前月から3.1ポイント減の35.1%、不支持率は3.2ポイント増の35.0%だった。支持と不支持が拮抗し、前月の「支持」超過が帳消しになった格好だ。

調査は全国18歳以上の男女2,000人を対象として6月9日から12日に実施、有効回収(率)は1,212(60.6%)だった。



この時期の国内の動きは、

新型コロナウイルス「5類」移行：新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが、これまでの「2類相当」から季節性インフルエンザと同じ「5類」に移行した。行動制限に関する法的根拠がなくなり、感染対策は個人の判断に委ねられる(5月8日)。

後期高齢者の保険料引き上げ：75歳以上が加入する後期高齢者医療制度の保険料引き上げを柱とする改正健康保険法などが参院本会議で与党などの賛成多数で可決、成立した(5月12日)。

電気代15～40%値上げ：政府は「物価問題に関する関係閣僚会議」を開き、電力大手7社が燃料費高騰を背景に申請していた家庭向け規制料金の値上げを了承した。平均15～40%の値上げを経済産業省に再申請し、6月1日に値上げが実施される(5月16日)。

ゼレンスキー氏、原爆資料館訪問：ゼレンスキー大統領は21日、広島市にある平和記念資料館(原爆資料館)を訪れ、館内を視察した。ゼレンスキー氏は芳名録に記帳し、被爆者の小倉桂子さんと面会。さらに岸田文雄

首相と共に原爆死没者慰霊碑に献花した(5月21日)。

広島サミット閉幕：先進7カ国首脳会議は21日、ウクライナのゼレンスキー大統領が対面で出席して広島市内のホテルで討議を行い、3日間の日程を終えた(5月21日)。

藤井、最年少名人、史上2人目七冠：将棋の藤井聡太六冠(20)は1日、長野県高山村で指された第81期名人戦7番勝負の第5局で、渡辺明名人(39)を後手番の94手で破り、4勝1敗で名人を奪取した。名人は最も歴史あるタイトルで、20歳10カ月での獲得は最年少記録(6月1日)。

国外では、

トランプ氏の性的暴行認定：トランプ前米大統領(76)から性的暴行を受けたとして、女性作家ジーン・キャロルさん(79)が損害賠償などを求めて起こした民事訴訟で、ニューヨークの連邦地裁陪審は9日、キャロルさんの主張をおおむね認めた(5月10日)。

タイ総選挙：タイで4年ぶりとなる下院総選挙が実施された。2014年のクーデター後の軍政を引き継ぐ親軍中心の与党は議席を減らし、軍や王制の変革を訴える革新系野党「前進党」が第1党となった(5月14日)。

役所広司さん男優賞＝カンヌ映画祭：第76回カンヌ国際映画祭の授賞式が27日夜行われ、ビム・ベンダース監督の「パーフェクトデイズ」で主演した役所広司さんがコンペティション部門の男優賞を受賞した(5月28日)。

トルコ大統領選決選投票：28日投票開票のトルコ大統領選挙の決選投票で、20年以上にわたって政権を維持する現職のレジェプ・タイップ・エルドアン大統領(69)が勝利を果たした(5月29日)。

中国、有人宇宙船打ち上げ：中国の有人宇宙船「神舟16号」が北西部の酒泉衛星発射センターから打ち上げられ、昨年末に完成した中国独自の宇宙ス

テーションとドッキングした。中国の宇宙開発には軍が深く関与しており、米国を中心に警戒感が強まっている(5月30日)。

日米豪比、初の防衛相会談：日本、米国、オーストラリア、フィリピンは3日、初めての4カ国防衛相会談をシンガポールで行った。海洋進出を強める中国をにらみ、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向けた安全保障分野での連携強化を確認した(6月3日)。

政党支持率 自民党の支持率は前月から0.2ポイント減の22.4%で、以下、立憲民主党は1.1ポイント減の3.1%、日本維新の会は1.4ポイント減の4.5%、公明党は1.3ポイント減2.6%、共産党は0.3ポイント増の1.7%、国民民主党は0.2ポイント増の0.9%だった。支持政党なしは5.0ポイント増加して59.8%だった。

政党支持率 (上段：6月、下段：5月)

自民党	立憲民主党	公明党	国民民主党	日本維新の会	れいわ新選組	社民党	政治的その他	支持政党なし
22.4	3.1	4.5	2.6	1.7	0.9	1.2	0.2	59.8
24.4	4.2	5.9	3.9	1.4	0.7	0.7	0.3	58.8

国民の景気感 「良くなった」は前月から0.3ポイント減の11.3%、「悪くなった」は5.7ポイント増の42.2%だった。時事世論景気指数は前月から15ポイント減の72となった。

時事世論景気指数

2013年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	20年	
143.8	129.1	126.0	120.0	131.9	130.0	109.9	25.0	
21年	22年	23年	(6月)	(7月)	(8月)	(9月)	(10月)	(11月)
34.6	26	10	22	10	9	11		
(12月)	(1月)	(2月)	(3月)	(4月)	(5月)	(6月)		
29	23	19	44	48	87	72		

暮らし向き 昨年の今頃と比べて「楽になった」は0.2ポイント増の3.9%、「苦しくなった」は3.2ポイント増の43.2%となった。